

(資料2)

『ペルジネッテ』

—フリートリッヒ・イマヌエル・ビーアリンクによる最初のドイツ語訳 (1765) —

訳 小 川 保 博*

Erste deutsche Übersetzung von Friedrich Immanuel Bierling (1765)

OGAWA Yasuhiro

ある二人の若い者がながい恋の末にようやく夫婦になりました。互いの愛情はひとが思うことができるものすべてを凌駕していて、二人はとても満たされ、この上なく幸せにともに暮らしていました。二人の満足がよりいっそう大きくなったのは、若い妻が妊娠したときでした。彼らのささやかな家庭で欠けているものはもはやかわいい子供だけであって、彼らの願望がこれでもなくなえらるることになったのです。

彼ら夫婦の近くにある妖精が住んでいて、その妖精はある美しい庭をとても大切にしていました。その庭にはことのほかすばらしい果物、美しさかぎりない草花が見られました。

当時パセリは同地方でまだとても珍しいものでありました。その妖精がそういったパセリをインドから自分のために持ってこさせていたのであって、この植物は彼女の庭園以外のいかなるところでも見つけられませんでした。若い妻はパセリをぜひとも食べたい気持ちにおそわれました。誰もその庭に入ることは許されなかったのに、自分の欲望が満たされたいへん難しいであろう、と彼女にはともかくも分かっていましたから、彼女はそ

のためとても嘆き悲しみました、その結果、彼女を夫がもはやほとんど見分けられないほどになりました。彼女の身も心もこんなに変えさせてしまったものは何なのかを言ってくれるようにと、彼は彼女に願ってしきりにせまりましたので、彼女は初めそれを彼に決して言おうと思わなかったのですが、しかしとうとう、パセリがとても食べたいのです、と彼に告白しました。夫がため息をつきましたのは、彼女の食欲を満たすのがどれほど困難であろうかと、彼には分かっていたからでした。しかし愛には何も不可能ではないのでありますから、どこからか中に入れるようにと、夫は妖精の庭の堀のまわりをぐるぐると日夜歩きましたが、その堀はものすごく高かったので、努力がすべて無駄になってしまうほどでありました。とうとう彼はある晩に庭の扉が一つ開いているのを目にしました。彼はこっそり入って行き、すばやく手一杯のパセリを取り、駆け去り、愛する妻に彼の略奪物を持ってきました。彼女はそれをががつむさばり食べましたが、しかしそれから二三日するとこの植物への欲求ははるかにより強くなりました。かわいそうな夫はまた妖精の庭のまわりをぐるぐる歩きましたが、しかしどこにも到れませんでした。とうとうあるときにまた開いている

* 工学部言語教育センター 准教授
2007年9月27日受付

扉を一つ彼は見つけました。彼は入っていきましたが、しかしことのほか彼が驚いてしまったのは、かの妖精を目の前に見たからです。妖精は、だれも来てはならないと言われている場所に彼があえて赴くことをした、と彼をしかりとばしました。ひとのよい夫はひざまずき、妖精に許しを懇願し、妊娠した妻がパセリを食べたくてたまらなくなっていて、そのためこのことはきっと許してもらえらるだろう、と彼は彼女に率直に言いました。よろしい！（と妖精は言いました、）私は彼女に欲しいだけパセリを送ってやろうと思うが、しかしその代わりに彼女には私に彼女が産むことになる子供を贈らせねばならないことになるぞ。夫は少し考え、そのことを妖精に約束し、それから持てらだけたくさんのパセリを取って行きました。

ベルジネッテ

小話 Conte

この妻の出産のときが訪れたとき、妖精は彼女のところに赴きました。彼女が女の子を出産すると、妖精はその女の子をベルジネッテと名づけました。妖精が女の子に黄金のおむつをあて、クリスタルガラス製の器に入れて持ってきていた貴重な水をその子の顔にぬると、彼女はこの世でもっとも美しい乙女となりました。その後に妖精はこのかわいいベルジネッテを引き取り、これ以上ないほど入念に育てました。ベルジネッテがまだまるまる12歳になる前に、彼女は美の奇跡と思われたのでした。ところが、彼女に不幸なことがたくさん間近に迫っていることが妖精には分かっていたので、彼女をそれから守ろうと妖精はしました。

ベルジネッテを守るために妖精は秘術をつかって、ある森の真ん中に、銀づくめの塔を一つ建てました。この魔法がかけられた塔には扉はなく、窓がたった一つあるだけでした。塔の中には広くて美しい部屋がいくつもあり、あたかも太陽が射しこみ照らしているかのように明るかったのですが、

それというのも、部屋という部屋の壁に紅玉がちりばめられていたからです。ぜいたくな生活に必要なすべてが、この世で珍しいと言われるすべてのものがそこにはたっぷり揃っていました。ベルジネッテがたんすや箱の鍵を開けさえすれば、ドレスや宝石など、自分が欲しいと望むものがすべて見つけれられ、しかもなにもかもが最新の流行に合うものでした。アジアのいかなる女王といえども、ベルジネッテよりもたくさんの貴重なものを手にすることはできませんでした。彼女にはすべてのものがあり余るほどあり、欠けているものは交際だけでしたが、しかしこの付き合いのないことこそは彼女の豊かさを無用にさせてしまうことだったのです。

あえて言うまでもないことですが、彼女にはまた毎日ことのほか貴重な食べ物が与えられていました。それに妖精以外の誰も目にすることはできなかったとしても、彼女は退屈ではありませんでした。それというのも、読書をしたり、いくつかの楽器を演奏したり、歌ったり、要するに、しつけのよい娘なら心得ていなくてはならないあらゆることで彼女は楽しんでいたからです。彼女は塔の一番高い部屋で眠らねばなりませんでした。その部屋の窓こそはこの塔の唯一の窓でした。妖精がベルジネッテを訪れるときには、この唯一の窓を通して彼女のところにやって来、そしてまたその窓から再び去っていくのでした。

この窓からの眺めは世界でもっとも美しいものでした。一方の側に海が見え、もう一方の側には大きな森が見え、その森の中にお城があったのです。ベルジネッテの声はすばらしく美しく、また彼女は歌うのが好きで、よく歌って退屈しのぎをしたのですが、とくに妖精が彼女のところにやってくる時にはそうで、じっさい妖精がくることがよくありました。ベルジネッテにある何か並外れたものといえば彼女の髪でした。それというのも、彼女の髪は30エレの長さがありながら、彼女の重荷とならなかったです、それに髪はつむいだ金

のようにすばらしく明るい黄色でありました。彼女はいつも髪に美しいリボンを巻きつけていました。そこで妖精が彼女を訪れたいと思ったときには、妖精は塔の下で大声で言いました：ベルジネッテ！お前の髪をおろしなさい、それを伝って登ってゆこうと思うのでな、そしてそのようにして妖精はいつも登っていったのです。

ベルジネッテがある時、妖精がまもなくやって来るだろう、と思ったときに窓辺に立ち、心ゆくまで歌を歌っていました。たまたま狩に出ていた一人の若い公子が部下たちからはぐれ迷ってしまっていました。公子が一頭の鹿の後を追ううちに興奮しすぎてしまったからでした。彼がこの塔のところにやって来、すばらしい声を耳にし、見上げると、天使のように美しい顔を彼は目にとめたのです。彼はおそらく20回もその塔の周りをぐるぐる歩いたのですが、まったく扉が見つからず、しかも高いところに窓がたった一つしか見えなかったのです。彼はほとんど死にそうなほど深く悲しみました。彼はそのときにはすでに心から惚れ込んでしまっていて、勇敢さにもかけておらず、それゆえでできれば突撃して一挙にその塔を征服してしまいたいと思いましたが、しかしさすがにそれはできませんでした。

ベルジネッテの方とはいえば、彼女が驚きのあまり我を忘れてしまったのは、かくも好ましい男性の姿を見てとったからでした。彼女は彼をはじめしばらく観察していたのですが、しかしその後とつぜん窓辺から去りました。それというのも、それはひょっとして命を奪う怪物かもしれないだろう、と彼女が思ったのは、なかには目で殺してしまうものもいると耳にしたことが思い浮かんだからでしたし、彼の目がとても危険であることにすでに気づいていたからでした。

公子がほとんど絶望してしまったのは、彼女が見えなくなってしまったからでした。彼はすぐ近くの何軒かの羊飼いの住いで彼女のことを尋ねてみ

ましたが、この塔を建てたのはある妖精で、彼女がそのなかに若い乙女を拘禁している、と言って聞かされるだけでした。このときから公子はこの塔のまわりをほとんど毎日ぐるぐると忍び歩きました。とうとうあるとき妖精がやって来るのを彼は目にしました。彼が茂みに身をひそめると、妖精が大きな声で言うのが聞こえてきました：ベルジネッテ！お前の髪をおろしなさい、それを伝って登ってゆこうと思うのでな。彼もまた、この若い美女が髪をほどこし、それをおろし、妖精がそれを伝って登っていくのを目にしました。誰かを訪問するこのようなやり方が彼にはとても礼儀正しいように思えたのです。

明るる日、いつも妖精がやってくる時間が過ぎ去るだろう、と彼は思いながら、夜を今か今かと彼は待ったのです。真っ暗になると、彼は窓の下に歩んで行き、妖精の声をまねて、大きな声で言いました：ベルジネッテ！お前の髪をおろしなさい、それを伝って登ってゆこうと思うのでな。

ひとのよいベルジネッテはだまされ（それというのも、彼が妖精の声をみごとに真似るすべを心得ていたからです）、いそいで来て、髪をおろしました。公子はすばやく登っていきました。彼が窓に来、このすばらしく美しい乙女をすぐ目の前に見たとき、驚きのあまりほとんどまた落下してしまいそうでした。けれども彼はじっとこらえました。彼はすばやく飛び込み、彼女の足元にひれ伏し、彼女の膝を抱きしめましたが、それはすべて、身を守るべきか否か彼女には分からないような振舞い方でした。彼女は自分が震えるのに驚き、自分が何をしたのだろうか分からないほどでしたが、しかし彼女が公子に吹き込んでしまっていた愛が残念ながら彼女の哀れな心にも忍び込みました。彼はこの世の好ましき限りないことどもを彼女に語り、彼女はすべてのに、公子に最善の期待をさせるような動揺でもっぱら答えました。彼はいつそう大胆になり、彼をすぐに夫として受け入れて欲しいと彼女に嘆願しました。ベルジネッテ

はそうしました、かくして結婚がその場で本当になりました。

公子は自分が幸せ限りないと思い、ベルジネッテは日を追うごとにますます彼が好きになりました。はたして彼も毎日やって来るようになりましたが、しかしほどなく哀れなベルジネッテは体の変化に気づき、それには彼女はとても驚き、彼女のどこがよくないのかを公子は察していたのですが、その秘密を彼女にできれば明らかにしたくありませんでした。彼女をあまりに悲しませることは決してしたくなかったからです。しかし、妖精がやがて事態がどうなっているのかを見て取りました。まあ！ひどい娘め！（と妖精は彼女に言いました）、お前は何をしたのか。お前の過ちはとても大きく、お前は実際またそのために罰せられることになるわ！私にはそれがよく見える、運命は避けられないし、私のすべての用心が結局なにも役立たなかったわけだ！そう言うとき妖精は、何もかも正直に話しなさい、と彼女に厳しく命じました。ベルジネッテは言われたとおりにしたのですが、その話す態度があまりに無邪気で、しかも涙をあまりに多く流しながらでしたので、私はこのことを思い出すたびに、私自身の目から涙があふれてしまうのです。

妖精はいささかも心を動かされませんでしたが、たしかにベルジネッテは罰を受けても当然でした。妖精はただちにベルジネッテの髪を短く切ってしまい、その後で秘術を使って彼女を下におろし、自らも後に続きました。下におると、とても厚い雲が彼女らを包み、この雲が二人を海辺の、人里はなれているけれども、快適なところにはこんで行き、そこには美しい草地や森があり、澄んだ小川が一つありました。またそこに木の葉づくりの小屋が一軒あり、その葉はけっして枯れてしまうことがなく、小屋にはイグサでできた寝床があり、小屋のとなりにはビスケットが入ったかごが一つあり、そのお菓子が尽きることは決してありませんでした。妖精は彼女をもう一度厳しく叱り、

それには彼女はほとんど自分の不幸以上に悲しくさせられたのですが、ともかくしかた後で妖精は去って行き、彼女をひとり残したのです。この人里はなれた地で彼女はしばらくして公子を一人と公女を一人産みました。彼女はこの二人をできる限りよく世話をし、育てましたが、身の不幸を深く悲しむのでした。

妖精にはこうした報復ではまだ十分ではなく、公子をも支配下におさめ、彼を罰しようと彼女は思いました。家に帰るとすぐに妖精は塔に登りました。そこでベルジネッテのように歌いました。公子が再びやって来て、大きな声で言いました：ベルジネッテ！お前の髪をおろしなさい、それを伝って登ってゆこうと思うのでな。妖精は切り取ってあったベルジネッテの髪をすでに結っていたので、それをすぐにおろしました。公子はいそいでのぼって行き、窓からのぞき、ベルジネッテが見えないのをいぶかしく思いましたが、なかに入って行きました。すると妖精が隅から出てきて、怒りの身振り手振りをまじえながら言いました：お前はなんと不遜な奴か！お前が行った振る舞いにふさわしく罰せられないではすまさせないぞ。公子は自分のことよりベルジネッテのことが心配になり、彼女はどこにいるのかと尋ねました。お前のためには（と妖精は言いました、）ベルジネッテはもはやいないぞ。公子は悲しみから深く絶望したので、窓から身を投げました。いともたやすく体の骨がすべて砕けてしまったかもしれませんが、じつは、両目を傷つけたので彼は目が見えなくなっただけで、それ以外の損傷は何ら受けませんでした。

目がもはや見えないのに気づいたとき、公子は自分がどうなったのか分からず、しばらく塔の下で横たわり、ベルジネッテ！という名を数かぎりなく大きく叫びました。彼はおぼつかない足どりで手さぐりしながら歩き続け、できるかぎり遠くまで歩んでゆきましたが、彼に手を貸し、道を教え示してくれるような人には出くわしませ

んでした。お腹がすいたときには草や茎を食べ、水辺にやってきたときにはほとんど落ち込みそうになりながら水を飲み、ぶ厚い草を見つけたところで彼は眠りました。こうしたことが何年か続きました。あるとき、彼の最愛のペルジネッテのこと、自らの不幸のことを思い出すといつもはなかったほどに苦しかったので、彼は一本の木のもとに横になり、数々の悲しい思いにひたりました。このようにすることは、よりよき幸せに値する人にとってはことのほか残酷なことなのです。突然とても快い声が聞こえ、歌を歌っていました。この最初の音をいくつか耳にすると彼の心の動きが安らかになり、その安らかさが彼の心をはるかにますます感動させたのは、そうした気持ちをたえて長く感じたことがなかったからでした。とうとうその声さえもが彼に分かったのです。おお、天よ！（と彼は叫びました、）これこそは私の最愛のペルジネッテの声だ！

彼はまちがっていませんでした。彼は気づかぬうちに彼女のいる人里はなれた地に来ていたのです。彼女は小屋の入口に座り、彼女の子供たちがかたわらで遊んでいましたが、そのうち彼女から少し遠ざかりました。子供たちは公子が横になっている木のところにやって来ました。彼らは公子をみるやいなや、彼に抱きつき、くりかえしきつく抱きしめ、愛するお父さん！と彼を呼んだのです。子供たちはふたたび母親のところに駆けて行き、大喜びの叫びをあげたので、ペルジネッテはどう考えたらよいのか分かりませんでした、それというのも、彼女がこの人里はなれた地で暮らすようになってからというもの、なにも変わったことがたえてなかったからです。彼女が愛する夫を目にしたとき、彼女の驚き、そして彼女の喜びがいかに大きかったことか！そのようなものは言葉では表せないものです。彼女は大きな声を上げ、彼を抱きしめ、つぎつぎに流れる涙が彼の顔に落ちるにまかせたのでした。こうなるのはとても自然なことでしたが、そのとき不思議なことに、彼女のかけがえのない涙によって公子に視力がも

どってきたのでした。彼はかつてのように明るく見えるようになり、まだ一度もしたことがなかったほどに心こめて彼女を愛撫しました。この家族のすてきな喜びと愛情を目にするのはほろりとさせられる光景でした！

ペルジネッテ

昔話 ein Märchen

そのようにしてその日の残りが過ぎてゆきました。日が暮れると、彼らは少し食べようと思いました。公子がかごからビスケットを一つ取りましたが、しかしそれは石になりました。ペルジネッテにも同様のことがおきました。彼らはびっくり仰天し、悲しみのあまりなかば死にそうになりました。かわそうな子供たちは泣きました。彼女は子供たちにはせめて水をひと口与えたいと思うのですが、水はクリスタルに変わるのでした。夜になりました。おお！なんと悲しい夜であることか！この夜がいつまでも続くのだろうと彼らは思いました。

朝になっていくつかの草や茎を探そうと思ったのですが、彼らがそれら草や茎をもぎとるやいなや、草や茎がヒキガエルやトカゲに変わってしまうのでした。あたりのナイチンゲールがカラスやフクロウになったので、彼らはびっくりしてしまいました。われわれはもうおしまいだ！（と公子は悲嘆にくれ言いました、）最愛なるペルジネッテよ、このように私がお前と再会させられることになったのは、よりいっそう恐ろしくお前を失うためだけだったのだ！ペルジネッテは夫を愛情こめて抱き、そして言いました：がまんして死にましようよ！私たちの敵がもうこれ以上私たちの不幸を喜ばないようにするために！彼らのかわいそうな子供たちは彼らのふところに抱かれていて、飢えと渇きのあまり死にたいと思いました。このあわれな家族の悲惨さは言葉で言い表せないほどでした。しかし彼らのために奇跡が起きたのです。あの妖精が彼らのことをあわれんだのです。妖精

が黄金と宝石に光り輝く車に乗ってやってき、若い夫婦をそれに乗せさせ、子供たちも夫婦の足もとに坐らせ、そのようにして彼らを王様、つまり公子の父のところに連れて行きました。公子の帰還にたいする喜びは言い表せないほど大きいものでした、それというのも、公子はすでに何年も前から死んだものと思われていたからです。王様は美しいペルジネッテとかわいい子供たちを喜んで受け入れ、かくしてこれで公子は静穏に暮らす幸せを味わうことになったのです、かくも長いときを悲嘆と悲慘のなかで過ごしたあとで、彼は愛する妻と長年にわたりことのほか幸せに暮らしました。

よき夫と妻たちよ、互いに忠実に愛しあえ！
あの二人がおちいったようなあらゆる苦境にあっても！
多くの心の苦しみのあとには
喜びがふたたびくる。

(訳出したテキストは、

PERSINETTE in Rapunzel, Tradition eines europäischen Märchenstoffes in Dichtung und Kunst,
Brüder Grimm-Museum Kassel 1993, S.17-27.)